マーク表示の理解度に及ぼす加齢の影響に関する基礎的研究

○堀江良典（日本大学）、赤木啓子（(財)日本色彩研究所）

A fundamental study of aging effects on cognition for mark displays

Yoshinori Horie(Nihon University), Hiroko Akagi(Japan Color Research Institute)

1. はじめに

色彩を加えた安全記号は、事故防止および身体保護に必要な情報を伝える得ることが実証されている。さらに、図解または絵図入りの標識は、安全メッセージをより効果的に伝達できるため、より高い安全性を保証できる。本研究は代表的な安全標識の表示事項である注意・禁止・誘導（指示）・安全について、それを表す図記号の色彩およびフレーム形状の認知効果を加齢変化の視点から考察するものである。

2. 実験概要

注意・禁止・誘導（指示）・安全についてのマーク表示の理解しやすさを調査するために図記号の色彩（赤、橙、黄、緑、青、黒）とそれを取り囲むフレーム形状（円、三角、四角、菱形）を組み合わせ、小学

生、大学生、高齢者を調査対象者として、それぞれの意味に対して適合性の高いもの、低いものを各1位から3位まで選択するアンケートを実施した。

3. 実験結果

色彩については大学生の誘導以外各年齢男女とも注意・禁止・誘導・安全のいずれの意味においても赤が適合していると答えた。これは刺激色の中で赤が最も誘目性が高かったためであろう。高齢者は全ての意味で黄色が不適合であった。これは提示色の黄色が高彩度であったために、加齢による白内障の進行の影響が現れている。

今回の提示刺激は、表示面と背景を白としたため、フレーム形状の差は大きくは現れず、色彩の影響が強く作用する結果となった。

[MEMO]